Journal of Indian and Buddhist Studies
(Indogaku Bukkyōgaku Kenkyū)
Vol. XLI No. 1, December 1992.

『梵天勧請』の原型

阪本（後藤）純子

『梵天勧請』の原型

阪本（後藤）純子

ゴータマ・ブッダの生涯の中でも『梵天勧請』とよばれる出来事は仏教成立のそもそもの出発点として重要な役割を与えられ，多様な変容を被りながら各部派に伝承された。後の大乗仏教においては新たな思想的展開を遂げるが，本稿では小乗部派に伝わる比較的古い文献を中心にその原型を探る。対象となる文献は5グループに大別される：

I.（根本）説一切有部：1. Dīrghāgama, Catuṣpariṣatsūtra ［CPS］ 8,1—18 (Ed. WALDSCHMIDT 108—120, 440—442) ～衆許摩訶帝経（大正 I 952c—953a). 2. Mūlasarvāstivādin Vinaya, Saṅghabhedavastu ［SBV］ (Ed. GNOLI I 128—130)＝根本説一切有部毘奈耶破僧事（大正 XXIV 126bc)；大智度論（大正 XXV 63ab). ——II. **Pāli**: 1. Saṃyutta-nikāya ［S］ vi Brahma-saṃyutta 1,1 āyācanaṃ (Ee I 136—138). 2. Majjhima-nikāya ［M］ 26 Ariyapariyesana-sutta の一部 (Ee I 167—169)＝M 85 Bodhirājakumāra-sutta の一部 (Ee II 93). 3. Vinaya ［Vin］ i Mahāvagga 5,1—13 Brahma-yācana-kathā (Ee I 4—7). 4. Dīgha-nikāya ［D］ 14 Mahāpadāna-sutta 3,1—7 (Ee II 35—40). 5. ［注釈文献］ Jātakatthavaṇṇanā, Nidānakathā の一節 (Ee I 81). ——［対応漢訳］:［Vin＝］五分律〔化地部〕(大正 XXII 103c—104a)；［D～］長阿含経 1 大本経〔法蔵部〕(大正 I 8bc)；［1—4 のゆるい対応：］四分律〔法蔵部〕(大正 XXII 786b—787b)；増一阿含経 19,1 勧請品（大正 II 593ab)；仏本行集経（大正 III 805c—807a)；過去現在因果経（大正 III 642c—643a). —— III. 仏伝 (1): 1. Mahāvastu ［Mvu］〔大衆部説出世間部〕(Ed. SENART III 313—319). 2. Lalitavistara ［Lal］〔大乗系〕(Ed. LEFMANN I 392—400, Cf. SCHUBRING, Zum Lalitavistara, Asiatica, Fs. WELLER, 610—615)＝方広大荘厳経（大正 III 602c—605a). —— IV. 仏伝 (2) 梵天勧請と帝釈窟説法の融合形：1. 太子瑞応本起経（大正 III 479c—480c). 2. 普曜経（大正 III 527a—528c). ——V. 仏伝 (3): Buddhacarita xiv 95—103 (Tibet 訳と漢訳のみ伝わるが異同あり)：仏所行讃（大正 IV 27bc).

インド側の資料を欠く IV，V を除外し，Pāli, Skt 全 version に共通の荒筋は次の通り：A. 世尊は成道後，Uruvelā/Uruvilvā の Nerañjarā/Nairaṃjanā 河畔の樹下で禅定に沈潜して独居を楽しみ，自らの悟った真理は深遠難解に過ぎるので説法はすまいと考える；B. 世界の滅亡を危惧する Brahmā 神[1]が梵天界か

ら来たり，衆生の多様性を説いて説法を勧請；C．世尊は仏眼をもって観察し，衆生の資質の多様性（蓮の比喩）を認識して慈悲を垂れ，説法を宣言；梵天は喜んで姿を消す。以上のA—Cは定型表現を中心とする散文で語られ，常に Śloka [Śl.] 2偈と Triṣṭubh [Tri.] 2偈を伴う：Śl. 1—2＝世尊の考え（Aの総括）；Tri. 1＝梵天の勧請の言葉 (B)；Tri. 2＝世尊の説法の宣言 (C)[2]。この散文定型句＋4偈の骨格を基礎に，各グループにおける発展の様相を分析する（下図参照）。

1. 1.　第1グループの梵天勧請話[3]は最も単純な形を示し，上記の骨格要素のみから成る。舞台は世尊が成道後3週間目に菩提樹下において12支縁起を認識した直後である。散文AとBの前半に続いて梵天が Tri. 1 で説法を勧請し，世尊は Śl. の2偈で否定的に答える。再び梵天の言葉（Bの後半）となるが，文の続き具合がやや不自然である。衆生の資質の多様性を蓮の比喩とともに詳説するのは他 version とは異なりBの梵天の言葉の中である（Cでは簡単な繰り返しのみ）。

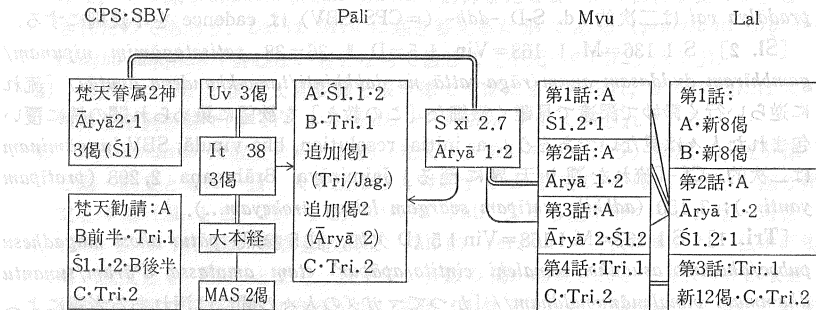
1. 2　梵天勧請に先立つこと3週間前，梵天の眷属二神 (*brahmakāyike devate*) が Āryā の各一偈をもって成道直後の世尊に活動を促し，世尊が Śloka 3偈で否定的に答える話がある：CPS 1, 1—12 (p. 74—79, 434f.)＝SBV p. 121f.（＝摩訶帝経 p. 951ab; 根本律 p. 125a)。内容も神名も梵天勧請と重複する点があるが，同じ Āryā の偈を伴う類似の話は第2・第3グループにも見られ，共通の起源を窺わせる。

2.　Pāli の梵天勧請 (S, M, Vin, D)[4] は基本的には同一 version であり，文の細部に至るまでよく一致する。Vin とDでは世尊は二度拒絶し，梵天は三度勧請を繰り返すが，既出の散文と偈を反復するだけの機械的拡張である。単独経であるS（成道直後の Ajapāla-nigrodha 樹下）が最も原型に近い。Mは同じ話を世尊の回想の中で Uruvelā の Senanigāma での出来事として述べる。Vin は成道後5週間目の Ajapāla-nigrodha 樹下の出来事とし，Dは過去仏 Vipassī の生涯の中に場所は特定せず一部改変して述べる[5]。話の展開は上記の骨格と基本的に同じで，Śl. 2偈はA末に現れる[6]。顕著な改変は Tri. 1の後に加えられる梵天の2偈である。一つは Tri./Jagatī の6 pāda から成り，Itivuttaka [It] No. 38 (Ee 31—33)[7] の第3偈を僅かに変えたものであり[8]，第二はS xi Sakkasaṃyutta, 2, 7 Vandanā (Ee I 233f.) の第2偈と同一である。Sの同所は梵天と帝釈天とが各1偈をもって世尊の活動を促す内容で，一見不規則な Śl./Tri. は Āryā から崩れたものであり，第1・第3グループの Āryā 偈と一致する[9]。

3. 1.　Mvu は4つの異話を重複や矛盾を残したまま列挙する（Ajapāla-nyagrodha 樹下)[10]。第1話：Aと Śl. 1—2のみ。第2話：Aに続き，梵天と帝釈天が多

くの神々と共に世尊を訪れ，Āryā 各1偈で活動を促すが拒否される。第3話：梵天が独り世尊を訪れ第2話第2偈と同じ Āryā で語りかけ，世尊は第1話第1偈と同じ Śl. で拒否する。第4話：Magadha の人々に悪思想(一種の終末論)[11]が発生；世界の破滅を恐れた梵天が独り世尊を訪れ Tri. 1 を語る；世尊は世間を観察して衆生に3種を区別し，中位の人々のために説法を決意，Tri. 2 を語る。

3. 2. Lal も異なる3話から成るが，時間的・論理的に一貫した整然たる構成を示す。多数の偈が新作され，Mvu と共通の材料を用いた文学的改作といえる(Tārāyaṇa 樹下)。第1話：A, Bを基に新しい16偈 (Tri./Jag. と Puṣpitāgrā 的傾向の Aupacchandasaka)；世尊は沈黙によって応諾。第2話：世尊の心は再び拒否に傾く；A, Bに続いて，梵天と帝釈天が全神々を伴って Āryā 各1偈で説法を促すが，世尊は Śl. 1—2 で拒否。第3話：Mvu 第4話に類似するが，梵天の Tri. 1の後に12偈 (Tri./Jag.) を付加。

[Skt・Pāli version対応図]

以上のような分析から次のような「梵天勧請」の基本構造が導かれる。第一の中核：散文Aと Śl. の2偈とから成り，説法せずに隠棲しようという世尊の考えの表明。第2の中核：散文B・Cと Tri. の2偈から成り，世尊と梵天との対話を内容とする。この二つが結合したところに梵天勧請の基本形が成立し，全 version を通じて確立している。他方，二神 (恐らく梵天と帝釈天) が禅定に沈潜する世尊に世間での活動を促すという motif が Āryā の2偈とともに成立し，あるいは単独の経典 (S I xi 2, 7) や独立の一節 (CPS・SBV：梵天眷属二神の話) として残り，あるいは「梵天勧請」の中に1偈のみ (Pāli, Mvu 第3話)，または全体的に (Mvu 第2話，Lal 第2話) 吸収されたと推定される。結合の仕方は別として，「基本形」も「二神と Āryā 偈の話」も (根本) 説一切有部・セイロン上座部・大衆部を通

じて見出され，根本分裂以前の共通の源泉に遡ると思われる。第1の中核の内容（説法躊躇・隠棲願望）が後の発展した仏陀観から見ると不都合になったと思われるにもかかわらず，定型句的な散文と偈が全 version に顕著な一致をもって現れることは，この部分の極めて古い成立を示唆する。また，梵天と世尊との対話の背景には成立当時のマガダ地方の思想状況（男性神格 Brahman とその世界創造説の成立，終末論など）の反映が想定されるかも知れない[12]。

---

1) Ⅰ. *Brahmā Sabhāpatiḥ*, Ⅱ *Brahmā Sahampati* (D *Mahābrahmā*), Ⅲ. *Mahābrahmā* (Lal *Śikhī*～).

2) (Pāli を中心に他 version は重要な点のみ注記) [**Śl. 1**] S Ⅰ 136=M Ⅰ 168=Vin Ⅰ 5=D Ⅱ 36=38 *kicchena me adhigataṃ/h'alan dāni pakāsituṃ/rāga-dosa-paretehi/nâyaṃ dhammo susambudho//*「苦難の道を通ってやっと私が理解したことを今説くのはやめておこう．欲望と憎悪に打ち負かされた人々にこの教えはたやすく悟れるものではない」．a. na-vipulā; b. *h(i)* の位置および *alam*+inf. が *alam*+instr. の価値で用いられるのは異例；CPS *khilā brahmaṃ pradālitāḥ* と SBV *'khilo brahman pradālya vai* は二次的；d. S-D *-ddh-* (=CPS･SBV) は cadence を不規則にする．

[**Śl. 2**] S Ⅰ 136=M Ⅰ 168=Vin Ⅰ 5=D Ⅱ 36=38 *paṭisotagāmiṃ nipuṇaṃ/gambhīraṃ duddasaṃ aṇuṃ/rāga-rattā na dakkhinti/tamo-khandena āvutā//*「流れに逆らい行く微妙で深遠で見難く微細な［この教え］を欲望に染められ闇の塊に覆い包まれた人々は見ないであろう」．a. initial resolution, bha-vipulā; SBV *'nugāminaṃ* は二次的. Cf.「流れを遡り天界に至る」Jaiminīya Brāhmaṇa 2, 298 (*pratīpaṃ yanti...*); 3, 150 (*adbhiḥ pratīpaṃ svargaṃ lokam āroheyam...*).

[**Tri. 1**] S Ⅰ 137=M Ⅰ 168=Vin Ⅰ 5 (D 欠如，註5参照) *pātur ahosi magadhesu pubbe/dhammo asuddho samalehi cintito/apāpur' etaṃ amatassa d^v^āraṃ/suṇantu dhammaṃ vimalenânubuddhaṃ//*「かつてマガダの人々の間には汚れある者達によって考えられた不浄な教えが出現した．この不死への門を開け．汚れない者によって悟られた教えを人々は聞くように」．a. 第2音節∪, break ∪∪∪, Pa. Mvu *ahosi* [aor.] に対し CPS･SBV･Lal *babhūba* [perf.], Lal *vado* は *prādur* から (KERN SBE 21, p. xii); b. Jag.; c. *apā-vṛṇo-ti* の非 Skt 的命令法：Pāli *apāpura*, CPS *avavṛṇīṣva*, SBV *apā°*, Lal *vi°*, Mvu は二次的に過去分詞 *apāvṛtaṃ*; d. break —∪∪— (hyper-Tri.). Cf.「不死への門を開く」は It 80, Vv v 14, 27；「天界…」*dvāraṃ svargāyâpāvṛtaṃ* Mahābhārata 6, 17, 8; *svarga-dvāram apāvṛtam* Bhagavadgītā 2, 32 (MBh 6, 24, 32); *svarga-dvāraṃ hi saṃruddham* MBh 12, 263, 45.

[**Tri. 2**] S Ⅰ 138=M Ⅰ 169=Vin Ⅰ 7=D Ⅱ 39 *apārutā tesam amatassa d^v^ārā/ye sotavanto pamuñcantu saddhaṃ/vihiṃsa-saññī paguṇaṃ na'bhāsiṃ/dhammaṃ paṇītaṃ manujesu b^r^ahme//*「彼らに対して不死への門は開かれた．聞く耳ある人々は信仰を発せよ．［説法しても理解されないのは］煩いであると思い，真直で崇高な教えを私は人々に語らなかったのだ，梵天よ」．a. break —∪∪∪ (hyper-Tri.),

CPS・SBV fut. *avāvariṣye/apā°*; b. break —∪—; c. *vihiṃsa-saññī* は散文 A *sā mam' assa vihesā* に対応，註釈は *kāya-vācā-kilamatha-saññī*. b. *pamuñcantu＝vis-sajjentu* (Buddhaghosa 註)；*pra-muc* も *vi-sṛj* も原義「自己の内部にあるものを外に放つ」から「捨て去る」だけでなく「発する，起こす」の意味でも Skt・Pāli を通じて用いられる（*pamuñcassu saddhaṃ* Sn 1146c [＝*saddhāya abhimuccanto*: Sn-a], *vācaṃ pamuñce kusalaṃ nâtivelaṃ* Sn 973c＝Nidd I 503f.＝Ja II 177, *saṇhaṃ giriṃ atthavatiṃ pamuñce* Ja IV 226, *vīṇāḥ pramumucuḥ svārān* Rāmāyaṇa 2, 85, 23. *vi-sṛj* は PW 参照）. この箇所は text の異同が大きい：CPS *pramodantu śraddhāḥ*「信じて喜べ」，SBV *praṇudantu kāṅkṣāḥ*「疑念を除け」. Mvu の偈は異例の 5 pāda からなり，e は Tri. 1b と同一，b は韻律的に不規則，更に *viheṭha-saṃjña-* が cd に 2 回続けて Pāli・CPS・SBV と異なる文脈で用いられる：*apāvṛtaṃ me amṛtassa dvāraṃ/brahme [ti] bhagavantaṃ ye śrotu-kāmā/śraddhāṃ pramuṃcantu viheṭha-saṃjñāṃ/viheṭha-saṃjño ⟨'⟩praguṇo abhūṣi/dharmo aśuddho magadheṣu pūrvaṃ//*「不死への門が私によって開かれた，梵天よ．世尊の言葉を聞こうと欲する者達は害意ある（*viheṭha-saṃjñāṃ*）信仰を捨てよ．かつてマガダの人々の間には不浄で害意ある邪な（*'praguṇo*）教えがあった」．これは Pāli の如き原形から二次的に崩れたもので，その際 *śraddhāṃ pramuṃcantu*「信仰を発せよ」が「信仰を捨てよ」と再解釈されたのであろう．Lal は Mvu に基き整えらた形である（*praviśanti śraddhā na viheṭha-saṃjñāḥ*「害心ない者となって信じて［不死への門に］入る」）．

3) 漢訳では Śl. 2 偈が大智度論と根本律で 1 偈にまとめられ，摩訶帝経には欠如．根本律と摩訶帝経では Tri. 1 *aśuddho* が *śuddho* として訳されている．

4) Nidānakathā は散文のみの要約（梵天は多数の神々を伴う）．漢訳では五分律が Vin と偈・散文ともに一致．大本経は D と対応するが散文のみ（註 7 参照）．四分律は散文と 4 偈（Śl. 1・2, Tri. 1・2）のみで Pāli よりも基本形に近い．増一阿含は 2 偈（Tri. 2; It 対応偈）を含む散文で Pāli 的 version の二次的要約か．仏本行集経は偈・散文とも Pāli とよく一致するが多数の偈が増補される．過去現在因果経は Śl. 対応の 3 偈のみ含み散文内容が少し変化（大梵天王など 3 神登場；2 週間の経過）．

5) Tri. 1 の欠如；追加の 2 偈（後述）が C の後にくる．

6) Pāli, Mvu では A に *ālaya-rāmā*...「人々は執着を喜びとし…」の一節が加わる．

7) It No. 38［世尊の安穏 *khema* と隠棲 *viveka* についての思索と Tri./Jag. の 3 偈］の話が大本経の梵天勧請の直前に現れる．(Mahāvadānasūtra [MAS] 9e 1/3, Ed. WALDSCHMIDT p. 147 f. は It の散文と第 1・第 2 偈のみで第 3 偈と梵天勧請を欠く．) It の 3 偈は Udānavarga [Uv] XXI 16—18 (Subaši 写本：278—281 の 4 偈)＝出曜経（大正 IV 720b）；法集要頌経（大正 IV 787c—788a）に転法輪と関連して現れる．

8) S I 137＝M I 168＝II 93＝Vin I 5＝D II 39 (Nidd I 360, 453f., II 138)（〜It: 註 7 参照）*sele yathā pabbata-muddhani ṭṭhito/yathā pi passe janataṃ samantato/tath' ūpamaṃ dhammamayaṃ sumedha/pāsādam āruyha samanta-cakkhu/sokâvatiṇṇaṃ janataṃ apeta-soko/avekkhassu jāti-jarâbhibhūtaṃ//*「岩山の頂上に立ってあまねく人々を見るように，そのように，明智ある人よ，真理から成る高楼に登って，あまねき目をもつ人よ，［自らは］悲愁を離れながらも，悲愁に沈み生老に打ち負かされた

人々を見渡せ」. 6 pāda; a. Jag., *ṭṭh°* m.c.; b. Jag.; c.d. Tri.; e. 13音節, Aup. の cadence を持つ不規則な Tri. ?; f. Tri., 1-4 音節 ∪——∪ *avekkhassu*≠It *avekkhati* ∪—∪∪. c—f の類似表現：*paññā-pāsādam āruyha/asoko sokinim pajaṃ/pabbata-ṭṭho va bhūmma-ṭṭhe/dhīro bāle avekkhati*//Dhammapada 28 c—f (Śl. 6 pāda)＝GāndhārīDhp 119＝PatnaDhp 19＝Uv iv 4（＝法句経；出曜経）＝Mil 387; *prajñā-prāsādam āruhya...* Mahābhārata 12, 17, 19〜12, 147, 11; 3, 198, 93.

9) ［Āryā 1］（帝釈天）S xi 2, 7 第1偈（Pāli 梵天勧請にはない）*uṭṭhehi vīra vijita-saṅgāma/panna-bhāra anaṇa vicara loke/cittaṃ ca te suvimuttaṃ/cando yathā panna-rasāya rattiṃ*//「立ち上がれ，勇士よ，戦いに勝った者，重荷を下ろした者，負債なき者よ，世界を歩き回れ，君の心は極めてよく解放されている，十五夜の月のように」. a. 11音節，一見 cadence の崩れた（∪— —∪）Tri.; b. 12音節，一見 cadence に resolution を起こした（∪∪∪— —）hyper-Tri., Caupāī 的リズム；c. Śl. sa (∪∪—)-vipulā; d. Tri. Pāli *panna(bhāra)* に対し SBV(·CPS) *parṇa(lopa)*, Mvu *pūrṇa(bharo)*, Lal *prajñā(kārā)* が対応するが，skt. pa. *panna-* (p.p. √*pad*)＞pkt. *paṇṇa-* から諸方言を介して変化したものである（cf. Upāli-gāthās 47 *parṇa-jaha-*: pa. *panna-dhaja-* ［O. v. HINÜBER, Fs. de Jong, Canberra 1982, 246f.; do. Sprachen des Buddhismus in Zentralasien, Wiesbaden 1983, 28ff.］; Gāndhārī *rṇ* ［*ṇṇ*］および GāndhārīDhp 27 *paṇa-bhara* ［J. BROUGH §45］).

［Āryā. 2］（梵天）S xi 2, 7 第2偈＝［Pāli 梵天勧請］S I 137（セイロン写本には欠如）＝M I 169＝Vin I 6＝D I 39 *uṭṭhehi vīra vijita-saṅgāma/sattha-vāha anaṇa vicara loke/desetu bhagavā dhammaṃ/aññātāro bhavissanti*//「…隊商のリーダーよ…(同上). 世尊は教えを示して下さい. 理解する人々もあるでしょう」. a. b. 同上；c. Śl. pathyā; d. Śl. 奇数 pāda の形. 上記の2偈に対応する偈は Mvu·Lal では新 Āryā (a は 1 mātrā 多い；vipulā 的), CPS·SBV ではやや崩れた Āryā（古 Āryā に近い）である. Pāli の2偈も僅かな変更により新 Āryā (ab: vipulā) になる：a. *vīra* の除去, b. voc. *anaṇa* の末尾延長, 1c. *suvimuttaṃ*→*visuddhaṃ* (Mvu·SBV); 1d. *yathā* の末尾短縮，最後の二語→複合語 *°rasa-rattiṃ*; 2c. nom. *bhagavā* の末尾短縮. しかし全 version に共通する a の 1mātrā 超過と SBV (·CPS) の形を考慮すると，先ず Āryā 1 が古 Āryā で作られ，それを基にして Āryā 2 が新 Āryā で増補された可能性も排除できない. H. SMITH, Les deux prosodies du vers bouddhique, Lund 1950, 38—40参照；これに対し，L. ALSDORF (Die Āryā-Strophen des Pāli-Kanons, Abh. Ak. Mainz, Jg. 1967, 283—298) は Mvu 的新 Āryā を原形とみなす.

10) 時と場所を説明する序文が一話毎に繰り返され，つなぎ文（*ettham etaṃ śrūyati*）が第3話と第4話の前に挿入される.

11) 風が吹かない・川が流れない・妊婦が出産しない・鳥が飛ばない・火が燃えない・日月が昇らない・世界が闇に覆われる（すべて opt.). Lal では一部変更される.

12) 梵網経・沙門果経等に見られる他宗派の教説や大戒における予言等の禁止を参照.

〈キーワード〉梵天勧請，仏伝，部派，韻律（大阪大学非常勤講師，Dr. de 3e cycle）